



研究課題名 言語と利他性の霊長類的基盤

京都大学・高等研究院・特別教授

まつざわ てつろう  
松沢 哲郎

研究課題番号：16H06283 研究者番号：60111986

研究分野：心理学、実験心理学

キーワード：比較認知科学、認知発達、利他性、言語、チンパンジー

【研究の背景・目的】

人間を特徴づける認知機能の特性を知るうえで、それらが「どのように進化してきたか」という理解が必要不可欠である。本研究は、言語と利他性こそが人間の子育てや教育や社会といった本性の理解に不可欠だという視点から、①人間にとって最も近縁なチンパンジー属 2 種（チンパンジーとボノボ）とその外群としてのオランウータンさらにはその他の大型哺乳類を研究対象に、②野外研究と実験研究を組み合わせ、③認知機能の生涯発達と知識や技術や価値の社会的伝播に焦点をあてることで、人間の言語と利他性の特徴を明らかにすることを目的とする。

【研究の方法】

京大の霊長類研究所と熊本サルクチュアリに比較認知科学実験施設が整備され、日本には皆無だったボノボ（チンパンジーの同属別種）の 1 群 6 個体を北米から導入した。ギニアで野生チンパンジーを、コンゴで野生ボノボの野外研究をおこなってきた。さらにマレーシアでのオランウータン研究が軌道にのった。そこで新たな試みとして、チンパンジーとボノボの双方を対象に、母子だけの社会を営むオランウータンを外群として、ヒト科 3 種の言語と利他性の霊長類的基盤の実証的研究をおこなう。

チンパンジーには、瞬間視記憶があるが、言語につながる象徴の成立は困難だ。人間には「想像するちから」があり、それを基盤に、子育てをし、教育をし、仲間同士助け合うという利他的行動を発達させてきた。人間の「想像するちから」が何にどう使

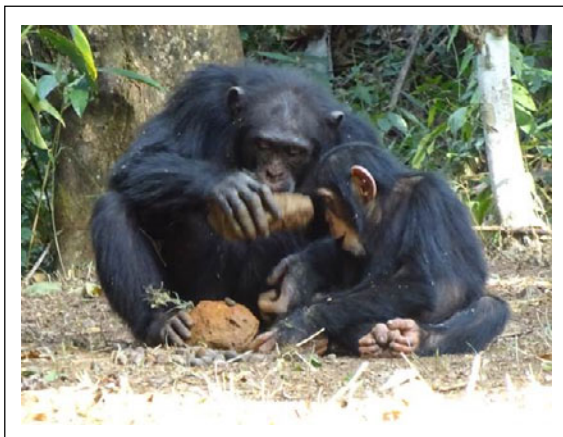


図 1、ギニアの野生チンパンジーの石器使用文化

われるか、それ以外の霊長類や大型哺乳動物と比較して、何が似ていて、どこが違うのかを検討する。具体的には、①言語的コミュニケーションと、②他者に積極的に手を差し伸べる行為、に焦点をあてて人間の特徴を解明する。

【期待される成果と意義】

「野外研究と実験研究を融合させた新たなアプローチ」によって、人間の比較対象としてのチンパンジーやボノボやオランウータンやその他の大型哺乳動物の認知機能の全体像の把握が著しく進むだろう。

言語と利他性に焦点をあてることで、現代社会の直面するさまざまな課題すなわち親子関係や家族や社会的きずなや教育や、その背後にある思いやりや助け合う心について、「人間とは何か」という普遍的な視点から、学問として妥当な解決の指針を与えることが期待される。



図 2、母子だけの社会を営むオランウータンの親子

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

- ・ Matsuzawa *et al* eds. (2006) *Cognitive development in chimpanzees*. Springer.
- ・ Matsuzawa *et al.*, eds. (2011) *The chimpanzees of Bossou and Nimba*. Springer.
- ・ 松沢哲郎 (2011) 想像するちから、岩波書店。

【研究期間と研究経費】

平成 28 年度－32 年度  
361,200 千円

【ホームページ等】

<http://www.matsuzawa.kyoto/>